

巻頭エッセイ③

# 「秋・斜光の季節」

文と写真／敷田麻実（野生生物保護学会会長）



北海道の秋は足早にやってくる。九月はじめは夏の蒸し暑さが残るが、末にもなると、夜は肌寒い。

北大の構内の木々も夏の勢いをなくし、どこかけだるげな九月の太陽を葉に受けて悶々としている。

ハルニレの木は、夏の間長く伸ばした枝に、やがては落ちるである黄葉を辛うじてまもって、憮然として秋空に立つ。

正面から照り下ろす夏の力強い陽射しも頼もしいが、傾いた秋の陽さしは、たゆたゆと揺れる葉の陰を北大構内の古い校舎壁に描く。

秋は斜光が美しい。

秋空には空気が透き通るような気配がある。薄い鱗雲がどこまでも続く秋空から、光の薄れた秋の太陽がゆるやかな光を落とす。

秋は斜光が美しい。

雨あがりの朝、雲間からさす強い光のすじは、濡れた路面をきらきら照らしながら進んでいく。葉先の水滴も、傾いた陽さしを集めて輝こうとする。

通勤の道で、斜光にふと目を奪われる朝。札幌はその日、秋になる。

